

## 花王+弘大 共同研究

# 内臓脂肪多で 認知機能低下

65歳以上で内臓脂肪が多い人は、脳の構造異常が生じている割合が高く、認知機能の低下につながっているケースも多いことが、花王(本社東京)ヘルス&ウェルネス研究所と弘前大学大学院医学研究科の中路重之特任教授のグループの研究で分かった。担当者は「内臓脂肪を減らすことが認知

症リスクを減らす可能性がある」としている。研究では、弘大COI研究推進機構と弘前市が高齢者の認知症について毎年調べている「いきいき健診」のデータを活用した。研究内容は8月にスイスの学術誌「ブレインサイエンス」に巻頭論文として掲載された。

## 65歳以上 健診データ解析

花王はいきいき健診で、独自開発した内臓脂肪計を活用。65〜80歳の人のうち、認知症と診断された人を除いた2364人を内臓脂肪が多いグループ(1143人)と少ないグループ(1221人)に分け、認知機能や脳の構造を調べた。高血圧や糖尿病、うつ、喫煙、飲酒などの要素が体に与えた影響を除いて判定した。

認知症の程度を調べる検査では、内臓脂肪が多いグループは出題問題への正答が少なく、認知機能が低下していることが分かった。

脳の構造は核磁気共鳴画像法(MRI)を使って調べ、内臓脂肪が多いグループで脳に、「白質病変」と「血管周囲腔拡大」の異常を多く見つけた。二つの症状はいずれも認知症への影響が報告されている。

花王ヘルス&ウェルネス研究所の大里直樹研究員は「今後、内臓脂肪に関する研究をさらに深め、内臓脂肪を減らすことが認知症リスクの低減につながるのかを見極めていきたい」と話している。

(富士和久)